

みんなで築こう人権の世紀

～考えよう相手の気持ち 育てよう思いやりの心～

12月4日～10日は

人権週間

12月10日(水)は「世界人権デー」、4日(木)から10日(水)までが人権週間です。この機会に改めて人権問題について考えてみましょう。

今回は、大阪大谷大学教育学部教授の桜井智恵子さんから、子どもの人権問題について寄稿していただきました。

「黒子のバスケ」脅迫事件から

幼児や小学生の命が犠牲になる事件が目立ちます。やりきれない事件に出会うと親たちは緊

張を高めざるをえません。こうした加害者はどうしてつくりだされるのでしょうか。

2014年夏、漫画『黒子のバスケ』をめぐる連続脅迫事件の裁判で、東京地裁は36歳の被告に懲役4年6カ月の実刑判決を言い渡しました。仕事も友人もなく、孤立し続けてきた彼はこう述べました。

自分の性格を歪めたのは、両親、いじめっ子3人、いじめに対応しなかった小学校教師2人、塾講師1人。意見陳述書では自らを「無敵の人」と表現し、失うものが何もなく罪を犯すことに心理的抵

抗のない人間のことと説明しました。さらに「無敵の人」は増えこそすれ減りはしないと切りました。

彼の論理や行いはあつてはならないことです。ただ、私には彼の言葉はリアルに感じられます。日本初の子どもの個別救済のための、公的第三者機関で6年、現在は滋賀県で毎週、教育現場と関わっています。その中で「元氣」な子どもそうでない子ども、人間関係と自分がどう評価されるかに神経をすり減らしている現実を目の当たりにしているからです。同様に、親も先生たちも本当に生きづらい。

「無敵の人」をつくらない

逆方向の指導

話を聞かせてもらってきた多くの子どもが一番の願いは「気持ちをおかしてほりたい」ところが大人たちは、もっと子どもを指導しなければという逆方向の対応で頭がいっぱいです。きちんとすること、頑張ることが大事という価値観が強まっています。先生たちにその意識はまったくなくても、学級の子どもには日々その価値観が叩き込まれています。そこで何が起ころうのでしょうか。

排除メカニズムの理解が必要

先生や親は「よかれ」と思い、学力や体力の向上のために、子どもを指導します。ところがその価値観が子ども集団の序列化を促してしまっているのです。

うまくできない、話せない子どもをできる子どもと尊重しないというメカニズムです。その価値観で、自然に外れた「仲間」はゆるやかにときに激しく排除されます。この排除メカニズムを大人たちが理解しない限り、深刻ないじめは無くならないでしょう。

しかし現在の対応策は的外れです。道徳教育が重視され「その子の問題」と指導が強まっています。孤立を促す「無敵の人」生産システムとして教育が機能しているのです。

被害者の子どもだけでなく、加害者の子どももSOSを出しているという理解は国際的な子ども救済の常識です。けれど、当事者の子どもの気持ちを受け止めることなく、背景や事実を調べ、教育や福祉部門の機関が連携して対応されています。これではますます社会や地域を衰退させるでしょう。おまけに現在は、雇用の受け皿が貧相で若者たちを受け止めず、労働環境の悪化も改善されていません。

必要なのは、居場所と働く場所

子どもも大人も頑張れないことだらけの状況です。就学前の子どもでさえ精神的に疲れているときに、頑張ることが良いとはとても言えません。休んで元気を回復しつつ出会いの中で人は変えられてゆきます。

今一番必要なのは、学力テストの成績を市町村が競うことよりも、どんな子どもも居場所があり、やがて仕事に就けるといふ安心です。

では、この悩ましい現在を子育て中の親たちはどう思っているのでしょうか。

毎年お招きいただく大阪市西区主催のPTA学習会。このまちにも哀しい記憶があります。2010年夏、2児の遺体が死後1カ月して発見され、孤立して子育てをしていた23歳の母親が逮捕されました。今年もワークショップで「わがまちに犯罪者をつくらないたい」と考え合い、幼児から中学生の親たちが出したまとめは次のようでした。

・不審者っぽい人に声をかける。私はあなたを見て、あなたはまだに受け入れられていると伝えるために。

・他者に声をかける地域性が生まれてきている。ここに暮らす私たちがそれを受け継いでいきたい。

同じ地域に暮らす人々が一歩前を出て、孤立した関係に働きかけるという覚悟を見せてもらい、不覚にも私は涙がこぼれそうになりました。「無敵の人をつくらない」という意見を分かち持ったのでした。

繰り返せば、最も大事な方策は、「無敵の人」生産システムとして機能している社会の悪循環を改善すること。居場所と働く場を地域で創ってゆくことです。これが大人や子どもの生きづらさを緩めます。

このちょっとした覚悟を携え「生きることはそう悪くないよ」と、子どもたちに生きる自由を語る大人がいる八幡市であってほしいと私は願っています。

大阪大谷大学教育学部教授

桜井 智恵子 さん

プロフィール

現在、大阪大谷大学教育学部教授。門真市教育委員会委員、大津の子どもをいじめから守る委員会副委員長、滋賀県立学校いじめ問題調査委員会副委員長などを務める。著書に『子どもの声を社会へー子どもオンブズの挑戦』、『市民社会の家庭教育』、『揺るがす主体・問われる社会』(編著)など。



人権擁護委員の活動

人権擁護委員は、市町村長が推薦し、法務大臣から委嘱された民間ボランティアです。

市では、現在8人の人権擁護委員が、人権相談を受けたり、人権の考えを広める活動を行っています。

相談は無料で、秘密は厳守されますので、困ったことがあれば、ひとりで悩まず、お気軽にご相談ください。(12月の人権相談日は、13面に掲載) 問い合わせ 人権啓発課



人権について話す人権擁護委員(中央小)

◇問い合わせ 人権啓発課